T・E・ヒューム「塹壕日記」の一解釈

兼武　進

一

「塹壕日記」は、T・E・ヒュームが一九一四年の暮れから翌年の四月半ばにかけて、フランスやベルギーなど、第一次世界大戦の陣中から郷里スタッフォードの家族に宛てて出した一連の書簡のことをいふ。

もう少し詳しくいへば、一九一四年一二月三〇日にフランスの戦線で書いた日記を嚆矢として、翌年四月一九日付けの日記まで、およそ百十日間のうち、全部で十五日分の記述を指す。これが何回に分けて故国に送られたかなど、具体的な事実は、今ではつまびらかでない。『続・思索集』に収められてゐるのは、送られて来た書簡をヒュームの家族が書写したものといふ。[1] ヒュームの筆跡が読みづらかつたための本文の欠落があり、また、軍隊の検閲で削除された部分もあるが、欠落はきはめて部分的であり、削除もおそらく軍事行動の機密にかかはる箇所のみであつて、そのために塹壕のなかでヒュームの感じ、考へた内容が大きく改変されてゐる惧れはないと思はれる。無論、戦時中のことゆゑ、書簡として連絡できる内容にはおのづから制約があつたであらう。しかし、われわれの手もとに残されてゐる部分だけからでも、当時のヒュームの思想についてなんらかの理解の鍵が得られるであらうことは、当然、期待してよいところである。

ヒュームの年譜を見ると、この時期はひとつの節目に当つてゐるといへる。一九一三年から一四年にかけて、彼の関心は哲学から美学に移り、そのころ簇出の気運が盛んであつたイギリスの新しい美術を擁護する論文をたてつづけに発表してゐた。さうして一九一四年七月に第一次大戦が勃発する。ヒュームはただちに名誉砲兵隊（実質は歩兵隊）に一兵卒として入隊し、一二月二九日にヨーロッパ大陸の戦場に送られた。「塹壕日記」はこの戦場で書かれたものである。そして四月、彼は腕に貫通銃創を受け（このとき彼の後ろにゐた兵士は、この銃弾で戦死してゐる）、本国送還となつた。負傷治療中のヒュームは、後

にハーバート・リードによつて「ヒューマニズムと宗教的態度」といふ表題のもとにまとめられる、彼独自の悲愴な世界観の素描を試みる一連の論説を雑誌に発表したり、バートランド・ラッセルを相手に平和主義批判を展開したりしてゐる。さうして、一九一六年末に再度従軍し、翌一七年九月、大陸の戦場で戦死する。

このやうな「塹壕日記」の記録前後の事情を斟酌すると、この日記の価値はきはめて高いものであるはずである。ところが、ここに見られるヒュームは、ひたすら戦場の現実を眺め、記録する眼になつてしまつてゐるといふ印象を受ける。死に直面してゐるはずのヒュームから戦争について、あるいは世界について、なにか決定的な認識や思索を得ようと期待する者は、あつけなく失望を味はされるのである。たとへば、ヒュームの評伝を書いたA・R・ジョーンズが、一連の書簡のなかで「ヒュームが一兵卒に変身する様が、アイロニーと誠実さをもつて記録されてゐる」と評し、さらに「ヒュームは、宿命論者に見られるアイロニーに満ちた、超然たる態度を採ることによつて、戦争の苦しみから自分自身を守つた」[2]といつてゐるのも、おそらく、ヒュームがあまりにも「眺め、記録する眼」になりきつてゐることにたいする不満が底にあるからではないかと思はれる。

しかし、わたくしには、ヒュームのこの「塹壕日記」は、自己を戦場といふ極限状態に投げこんだひとりの人間の、きはめて禁欲的な意志による認識の記録であるやうに見える。結果として、ヒュームは、「一兵卒に変身する」ことによつてではなく、むしろ「一兵卒」であることを内在的に超えることによつて、普遍的な認識を得ようとした、とはいへないだらうか。ヒュームの「超然たる態度」は、A・R・ジョーンズのいふやうに「戦争の苦しみから自分自身を守」るためだつたのではあるまい。ヒュームは意志の力で、「超然たる態度」を採りつつ戦争の現実を凝視しつづけ、凝視するなかで戦争を超えた、少くとも超える瞬間があつた、といふはうが当つてゐるやうに、わたくしには思はれる。

二

「塹壕日記」がひたすら戦場の現実を眺め、記録したものであることは、いくらでも例を挙げて立証することができる。といふより、全篇が、そのやうな記録の集積なのである。そのなかから、きはめて印象的な記述を引くならば、たとへばつぎの箇所などが適当であらう。

午後七時三〇分、わたしは今、温室の外に出て来たところだ。重砲の発射音がよく聞える。夏の遠雷の響き、とでもいはうか。われわれの現在地から八マイルしか離れてゐないところに火線と塹壕地帯があり、われわれは明日そこへ前進することになつてゐる。ひきつづき、地平線上にときおり閃光が見える。周囲を照し出すために用ゐられる一種の照明弾で、これにより、砲兵は動いてゐるものをすべて視認して、砲撃を加へることができる。注意深く耳を傾ければ、ときどき、塹壕のなかにゐる兵士たちの小銃

の速射音が聞えて来る。兵士たちは外の――砲のそばに立つて、まるで花火大会でも眺めるやうに、それを眺めてゐる。(3)

これは一月一二日、ヒュームがつひに前線に到着した夜の記録である。「温室」といふのは、葡萄栽培に用ゐる温室のやうなもので、一棟にヒュームたち兵卒が三百人ほども詰めこまれ、睡眠をとることになつてゐる。「――砲」とあるのは、おそらく、火器の種類を明示したために検閲で削除された部分であらう。引用の最後の「兵士たち」は、ヒュームのゐる「温室」の「外」に出てゐる兵士たちのことと思はれる。ここには、ヒュームの感情と呼べるものはまつたく記されてゐない。ただ、戦場の夜の光と音が記録されてゐるだけである。

つぎは一月二七日の日記である。おそらく、その数日前に塹壕に入つたときの経験を記録したものであらう。身長が六フィート以上あつたはずのヒュームが、四フィートそこそこの通路を、真つ暗闇と泥のなか、這ひずつて進んだ後の、塹壕の様子である。

わたしは狭すぎるうえに、立つことも坐ることもできないところに入りこんだ。水に浸からないやうに、コークスの入つた袋の上に横になつてゐなければならない。そこに午後七時ごろから翌日の払暁まで、じつとしてゐなければならなかつた。きはめて惨めな経験だつた。眠ることもできないまま、いはば下水溝の底に坐つてゐるやうなものだ。溝の上のはうが少しづつ凍つていく。それ以外には、なにも見るものはない。なんともいひやうのない退屈さだ。(4)

浅い塹壕のなかに潜んで、地表に近いあたりの土が冬の夜の寒気で凍つていくのを眺める以外にすることがないといふのは、戦場でのヒュームの苛酷な経験を見事に象徴してゐるといへる。ヒュームもたまらず、「きはめて惨めな経験」「なんともいひやうのない退屈さ」だとこぼすのである。彼は、さらに、同じ日付の日記の少し後で、つぎのやうな述懐もしてゐる。

現実には、なにも絵のやうなところなどありはしない。これ以上に惨めな生存といふものは、考へられない。四日置きに四八時間づつ、こんなことをしなければならぬかと思ふと、すつかり憂鬱になる。要するに、どうしやうもないのだ。この退屈さと不愉快さには、腹が立つ。まつたく我慢ならない。(5)

「塹壕日記」の一連の記述は、鋭敏な感覚をもつて戦場の現実を兵卒の立場から記録したものであつて、陣中の忽卒の間に書かれたにもかかはらず、鮮かな視覚的印象を正確に定着させた、すぐれた文章になつてゐる。原則として、ヒュームは自分の感情を記すことにたいして禁欲的であり、イマジズムの詩法を唱へた彼にいかにもふさはしい硬質の表現を得たといへやう。そのヒュームが珍しく自分の感情を漏

らすのが、上に引いた例のやうなときである。

そのさい、ヒュームの言及には、ひとつのきはだつた特徴が見られる。それは、「惨めだ（miserable, wretched）」とか「不愉快だ（uncomfortable）」とか「腹が立つ（exasperated）」とか「気が滅入る（depressed）」など、おほむね不快感を表明する言葉のみが使用されてゐることである。ヨーロッパ大陸の冬、寒さと泥と砲弾と戦死者の遺体のなかを這ひずりまはることが快適であるはずもない。その苛酷な経験が簡勁な文章で記されるとき、読む者はヒュームの感懐に共感を深めるのである。まして、戦場に到着してからおよそ四〇日後、

このやうな生活にもだんだん馴れてきた。怪我をしないか、大雨でも降らないかぎり、少しも気にならなくなつた。(6)

と書かれると、われわれは、ヒュームが諦観のなかで「一兵卒に変身」していつてゐると判断しかねない。前に引いた、A・R・ジョーンズの「ヒュームは、宿命論者に見られるアイロニーに満ちた、超然たる態度を採ることによつて、戦争の苦しみから自分自身を守つた」といふ言葉は、このやうな判断の表現であらうと思はれる。

しかし、はたしてさうであらうか。「宿命論者に見られるアイロニーに満ちた、超然たる態度を採ることによつて、戦争の苦しみから自分自身を守」るために、人はこのやうな記録を残すものであらうか。二月二〇日付けの書簡には、「このやうに長い書簡は次回からは許可されないと差出人に知らせられたい」といふ検閲官の警告が付されてゐる。ヒュームが「塹壕日記」を故郷に送つたのは、なにか積極的で明確な意図があつたためとわたくしは考へる。さうして、それは、自分が凝視した戦場の現実や自分の姿を、正確な記録として留めておくといふ、明確な意識があつての試みだつたにちがひないと思ふ。「戦争の苦しみから自分自身を守」らうとする「宿命論者」の、懐かしい故郷宛ての書簡などではなかつたはずだ。

そのやうなヒュームの姿勢をうかがはせる文章は、現に、この日記のなかにもある。一月一五日付けの冒頭に近いところで、彼は、

われわれはまだ第一大隊に編入されてゐないので、一緒に塹壕には行かなかつた。わたしは、塹壕がどういふものか見たかつたので、夜、塹壕に行くことになつてゐる一隊に加はることを志願した。大きな木材を塹壕の底に敷き、兵士たちがその上に立てるやうにする、その木材を持つて行くのが任務だ。(7)

と書いてゐる。ここには、戦争を逃避あるいは回避しようとする精神ではなく、戦場の現実を己の眼でつぶさに凝視し、確認しようとする意志が認められるのではないだらうか。

もしこのやうに解釈することができるとすれば、「塹壕日記」は、「ヒュームが一兵卒に変身する様」が記録されてゐる日記といふより、「一兵卒」の姿を借りて戦場に立つたヒュームが、戦争の現実と、そ

こに投げこまれた自分の心理とを、「眺め、記録する眼」になつて見据えようとする、自己を装置とした認識の実験ではなかつたかと思はれてくるのである。

三

「塹壕日記」が故郷の家族を意識した書簡であつたことは、たとへばつぎのやうな箇所からも否定することはできない。

われわれはある学校付属のチャペルに連れて行かれ、われわれの分隊はなんとか祭壇の脇の一角を占めることができた。かういふ場所に大勢の兵隊が宿営させられて、小銃を祭壇に立てかけたり、聖人たちの立像にぶら下げたり、兵隊たちが祭壇の階段に眠つてゐたりしてゐるのは、とても奇妙な眺めだ。（スタンブルックに送るときは、この部分は省いたはうがいいでせう。）[8]

スタンブルックとはウスター近くの修道院のことで、ヒュームの伯母（または叔母）がふたり、ここに修道女として住んでゐたといふ。平時なら考へられないやうな瀆聖の行為を兵隊たちはせざるを得なかつたとしても、その記録を含む書簡が伯母または叔母たちの眼に触れることを、ヒュームは案じてゐるわけである。このやうな家族への配慮を見せた部分はほかにも、たとへば三月二一日の書簡にも、認めることができる。

しかしながら、この「塹壕日記」の全体の調子が、やはり戦場の現実の記録を目的としたものであることは紛れもないのである。家族への配慮が嘘であるはずはないが、検閲で警告を発せられるほど長文のこともある、詳細な記録を家に送るための偽装として、家族宛ての書簡といふ形態を取つてゐるのではないかと、わたくしには思はれる。それほど、戦場での経験を正確かつ詳細に記録しようとするヒュームの意気込みは顕著である。たとへばつぎのやうな記述を読んだとき、人ははたしてこれを家郷への便りとのみ見るであらうか。

午前の半ばごろ、突然、砲弾がヒューッと頭上を飛んで行く音が聞えた。それは（農場の）屋根の上で炸裂した。つづいて第二弾が来て、真つ赤な煙が上つた。屋根を直撃したのだ。赤い瓦が木端微塵に砕け、煙に混じつて飛び散つた。さらに三、四発、命中すると、中庭から豚が二匹、飛び出して来た。そこは空つぽだから、ドイツ軍は弾の無駄遣ひをしてゐるとわれわれは思つた。すると、その農場の向う側の畑を、ひとりの人間が横切つて行くのが見えた。しかし、それが兵隊かどうかは分らなかつた。ひよつとするとベルギーの民間人だつたかもしれない。砲弾は屋根の上に落ちつづけ、つひにひとつの屋根に火がついた。すると三十人ぐらゐの人間が、農場から畝沿ひに道路を這つて行くのが見えた。実際の情景をよく分つてもらふためにいへば、道路のこちら側に生垣があり、それから並木もあつた。さらに砲弾が降りつづ

け、たうとうひとつの屋根全体が燃え出した。続々と、人びとの群が道路を這つて行く。（これぐらゐ離れてゐると、いはば前こごみのシルエットが見えるだけだ。）これがさらにつづいた。さらに数百人が立ち去つたのではないかと思ふ。（彼らはみんな、おそらく、塹壕から帰つた後、睡眠を取つてゐたのだらう。）[9]

この砲撃の描写はさらにつづくのである。たしかに、文中に「実際の情景をよく分つてもらふためにいへば」といふ表現があり、書簡の受け手、少くとも自分以外の読み手の存在を想定してゐるけれども、これほどまでに詳細な砲撃の描写が、はたして家族宛ての手紙に必要なものであらうか。これは、「眺め、記録する眼」の、執拗なまでの営為ではないだらうか。

これに類する描写は、ほかにもいくらも拾ひ出すことができる。夜、ヒュームたちの分隊が塹壕に向ふ途中で砲撃を受け、泥のなかに俯せになる場面、また、塹壕に隠れてゐて砲撃を受け、仲間の兵士のひとりが腕と頭を吹き飛ばされる場面なども、さうだ。このやうな手紙をもらつた家族は、心配が増すばかりであらう。われわれはこの「塹壕日記」を読むとき、ヒュームの「眺め、記録する眼」の働きがきはだつて躍動してゐるのを見て、誰も、彼の記録する執念に圧倒されずにはゐられまい。これは、まさに、記録する意志、とでもいふほかない覚悟が書かせる文章であらう。

ところで、ヒュームが、彼の周囲で展開する戦場の光景を「眺め、記録」しようとするとき、ひとつの独特な見方が試みられてゐるやうに見受けられる。独特の見方とは、戦場の現実を平時の事物との比較において把握しようとする視点である。たとへば、一月一五日のつぎのやうな例がある。

唯一、苛立たしい思ひをするのは、照明弾が炸裂して、われわれの姿が真つ昼間のやうにはつきりと照し出されるときである。そんなとき、突然、路上で裸になつて、嫌な思ひをするやうな、この上なく不思議な感覚に捕へられるのだ。ほんたうはさうではないのだが、さういふ印象を受けてしまふ。夜、ヒースの生えた平坦な荒野か村の入会地を横切つてゐるとき、前方の長い線に沿つて輝きつづけるいくつもの光によつて照し出されて、木々や藪がシルエットになつて浮び上るやうな。それはまことに悪夢のやうなものであり、巨大な泥の皿の真ん中にゐて、その縁ではぐるりと爆発と砲撃がつづけられてゐる。花火でできた椰子の木に縁取られてゐるやうなものだ。[10]

照明弾の炸裂で、隠れやうもなく自分たちの姿が明るみのなかに曝し出されたときの印象を、これほど執拗に表現しようとする意志は、故郷の家族へ手紙を書く心理とは無縁のものといつてよいだらう。しかし、そのこととは別に、ここで、もうひとつ、読む者の注意を引かずにはおかないのは、比喩の使ひ方である。「路上」にせよ、「ヒース

の生えた平坦な荒野か村の入会地」にせよ、「木々や藪」にせよ、いづれも戦争とは関りのない、きはめて日常的な事物である。それらのイメージを動員することによつて、ヒュームは照明弾の印象を少しでも正確に定着させようとしてゐるのである。「花火でできた椰子の木」は、そのやうなヒュームの姿勢を見事に象徴するイメージだといはねばならない。

このことは、一体、なにを意味するのだらうか。わたくしには、ヒュームが戦場の現実と日常的な感覚との接点を求めようとしてゐるやうに思はれてならない。

同じやうな例はほかにもある。二月二〇日の書簡には、肩章の星までずぶ濡れになりながら二十四時間、塹壕のなかに坐つてゐなければならなかつたことを述べて、「一日、銃猟をした後、家に帰つて着替へをするのとは訳が違ふ[11]」といふ。また、三月二日の書簡には、かうある。

> 途中まで来て、われわれは担架を運ぶ者たちに出会つた。昼間の戦闘で戦死した兵士のひとりを運んでゐた。戦死者を運ぶときの彼らの急ぎ方は、負傷兵を運ぶときとはまつたく異つてゐる。歩調を乱して、ガス灯の点灯夫のやうに急いで行く。彼ら自身、流れ弾に当るのを避けようとしてゐるのだ。[12]

なぜ、ここでの比喩に「ガス灯の点灯夫」が使はれなければならないのか。薄暮のなか、ガス灯からガス灯へと急ぎ足に移動する、おそらくロンドンの、点灯夫の姿が、ヒュームの脳裡に浮び、戦死者を担架で運ぶ兵士たちの歩調を描写するには、それがもつともふさはしいと思つたからであること、いふまでもない。さらに、その少し後には、つぎのやうな日常生活の比喩がふたたび現れる。

> このくたびれる任務から帰つてゐると、どうしたわけか、とても静かだつた。弾丸など、ひとつも飛んで来ない。われわれはぶらぶら歩いて帰つて来た。月の明るい夜、夜も更けてパーティーから家に歩いて帰るときと少しも違はなかつた。[13]

勿論、戦場での経験をいちいち平時の経験と関連づけて把握することはできるわけもないが、ここに挙げた例を見ると、戦場での体験や印象をできるだけ正確に定着しようとするとき、ヒュームは平時の日常生活の記憶のなかに、もつとも適切な比喩やイメージを求めてゐることが分るのである。しかしながら、このやうに、戦場とは直接の関係のない、日常生活のイメージを思ひ浮べることは、はたして「一兵卒に変身する」ことなのであらうか。兵士も戦場にあつて、平時の日常を回顧するであらう。しかし、戦場の経験を定着させるのに日常生活のイメージを援用する精神は、戦場と日常のあひだの断絶ではなく、むしろ連続にこそ、関心を持つてゐるとはいへないだらうか。「塹壕日記」が、ヒュームが「一兵卒に変身する様」を伝へると、わたくし

には思へない所以である。

さらに、ヒュームは、自分の周囲の出来事や情景ばかりを記録したのではなかつた。彼は、認識する自己そのものをも認識しようと努めたやうに、わたくしには思はれる。たとへば、つぎの箇所には、ヒュームのそのやうな姿勢がはつきりと見て取れる。

> ある方向に実際にドイツ軍の戦線があるといふ、その事実が、風景の感じを一変させてしまふやうに思はれるのは、奇妙なことだ。無意識のうちに、ものごとをそれとの関連で方向づけてしまふ。平時なら、道路をどの方向に行つても、違ひはないともいへる。どちらの方角にも無限に延びてゐる。ところが、戦場では、ある道路を行けば、その先は、いはば奈落に至ることを、誰もが知つてゐるのだ。(14)

風景といふものはけつして客観的に存在してゐるのではないことを、ヒュームはここで具体的に経験してゐる。自分の生死のかかつたドイツ軍の存在によつて「風景の感じ」が「一変」してしまふといふ体験は、つきつめていへば、本質において、人間の認識は客観的なものではなく、現実にその人が置かれてゐる状況の制約を受けざるを得ないことを示してゐる。ヒュームは戦場にあつて、人間自身の認識をも観察の対象にすることになつたのだつた。

四

三月二日の日記には、つぎのやうな記述もある。

> これは奇妙な生活だ。なにひとつ確実なもの、固定したものがないといふ意味で。けつして同じ宿舎には帰つて来ないし、なにものも後に残して行くといふことがない。自分の場所といふものがまつたくない。動物のやうに放浪の生活を送る。決つたものごとに依拠することがない。そこに四日ゐるか、六日ゐるか、十日ゐるか、分らない。その上、帰つて行くのは、まるで違つた場所なのだ。ただひとつ固定してゐるのは、家からの手紙だけのやうである。なにかを伝へること、それが実際にはどういふ姿であるかを理解してもらふことは、とても難しい。日常の平凡を超越してゐて、それで説明するのが難しすぎる、といふのではない。さういふ理由ではない。とにかく、独特の事情があるのだ。もしわたくしが塹壕のなかの退屈な一日や、夜、疲れきつて闇のなかを農場へと帰つて行く行軍の話をしても、すぐに誤解されるのが落ちである。わたくしが農場といふ言葉を使ふと、受取る側の頭には農場の固定観念があつて、それはわれわれの――してゐるところの――とは違ふものなのだ。(15)

この引用の最後の部分だけなら、ヒュームは戦場と平時の日常との

断絶を強調してゐると読めるであらう。しかし、彼の真意がそこにあつたとは、わたくしには思へない。ヒュームが戦場での印象を定着させるために日常のイメージまでも活用したことを知ると、この引用のなかでも、「日常の平凡を超越してゐて、それで説明するのが難しすぎる、といふのではない」といふ箇所に着目することになるのではなからうか。戦場と日常とが安易に結びつくものでないことはいふまでもないが、ヒュームがあへて生命の安全を賭しながら試みてゐることは、なんとか両者のあひだを言葉によつて架橋して、認識の接点を求めることではなかつたであらうか。

見る者の置かれた状況によつて「風景の感じ」が「一変」するといふ経験を、ヒュームはした。戦場での生活に「なにひとつ確実なもの、固定したものがない」といふ状況に置かれたときの不安がどれほどのものであるかを、彼は生死の境で経験しなければならなかつた。平時の平凡な日常の象徴である「家からの手紙」は、戦場のヒュームにとつて、ただひとつ確実で固定したものであつた。そのやうな彼の心事を思ふとき、ひたすら正確さを目指して、戦場のおぞましい現実を言葉によつて定着しようと努める彼の姿勢から窺へるものは、A・R・ジョーンズのいふやうな、「宿命論者に見られるアイロニーに満ちた、超然たる態度を採ることによつて、戦争の苦しみから自分自身を守」らうとする、逃避的なヒュームでは、おそらくあるまい。さうではなくて、あへて危地に身を晒しつつ、自己の経験に徹することによつて、戦争の現実と本質を認識しようとする、果敢なヒュームの姿こそ、「塹壕日記」を読む者の前に立ち現れて来ると思はれるのである。

註

(1) T. E. Hulme, *Further Speculations*, ed. Sam Hynes (University of Nebraska Press, 1962), p. 148.

(2) A. R. Jones, *The Life and Opinions of Thomas Ernest Hulme* (Victor Gollancz, 1960), p. 132 and p. 133.

(3) T. E. Hulme, *op. cit.*, pp. 150-51.

(4) *ibid.*, p. 157.

(5) *ibid.*, p. 157.

(6) *ibid.*, p. 160.

(7) *ibid.*, p. 153.

(8) *ibid.*, p. 156.

(9) *ibid.*, p. 166.

(10) *ibid.*, p. 154.

(11) *ibid.*, p. 162.

(12) *ibid.*, p. 164.

(13) *ibid.*, p. 164.

(14) *ibid.*, p. 164.

(15) *ibid.*, p. 164.